様式２

平成２８年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

地元再発見の旅プロジェクト

代表者　　東　谷　風　花（経済学部経営システム学科２年）

１．目的と概要

香川県には、有名な観光地以外にも多くの魅力的な観光資源が存在する。しかし、外部の人はおろか地元の方々でさえそれを知らないというのが現状である。

そこで本プロジェクトでは、香川県の観光資源・食・地場産業などを地元の方々に発信することで、地元の隠れた魅力を再発見してもらい、地域活性化に繋げることを目的として、新日本ツーリスト株式会社と連携し、「地元再発見の旅」をテーマとしたバスツアーの企画・添乗を行った。

２．実施期間（実施日）

平成２８年４月１日から　平成２９年３月３１日まで

	日程	場所・内容	参加人数
第１７弾	６月４日（土）	三豊市三野町	１４名
第１８弾	７月１６日（土）	男木島	１２名
第１９弾	１１月１９日（土）	五色台	１２名
第２０弾	１２月１０日（土）	三豊市財田町	１７名
第２１弾	１月２１日（土）	坂出・満濃・丸亀	７名

３．成果の内容及びその分析・評価等

今年度、「地元再発見の旅」ツアーは、第１７弾から第２１弾までの計５回行った。「地元再発見の旅」がテーマであるため、ツアー目的地は香川県内に限定し、地元香川の方を対象として、ツアーの企画を行った。ツアー内容は、地域（市町村・企業・大学等）と絡んだ、個人では体験できない、このツアーならではの掘り下げたものを企画している。これらの企画は学生が主体となって行っており、学生自らが実際に現地へ視察に行き、地域の方と交渉をし、打ち合わせを重ねて、１つのツアーを作り上げていっている。そして、自分たちの企画したツアーに実際に添乗し、自分たちの手で参加者の方に地元香川の隠れた魅力を発信してきた。

ツアーは、ただ添乗するだけでなく、学生がガイドなどを行っており、そのためにツアー当日まで何度もその地域を訪れ、まず自分たちが地域の良さを理解するように努めている。この活動を通して、学生達自身も香川県の魅力を再認識することができている。

「地元再発見の旅」ということで、地域でまちづくりや地域活性化に貢献している方々の存在は欠かせない。それらの方々にご協力していただくことで、ツアーの内容はより濃いものになっている。また、そのようにツアーで行き先として選び、一緒に１つのツアーを作り上げていくことは、地域で活躍される方々を勇気づけることに繋がっている。

新日本ツーリストの顧客は年配の方が多いため、必然的に本プロジェクトで実施するツアーの参加者も年配の方が多い。そのため、ツアーそのものの楽しみに加え、若い学生達との交流も喜んでいただけている。「普段交流することはない若い子達と話すことができて元気がもらえた」と毎回温かいコメントをいただいており、参加者の方々に活力を与えることができていると言える。回数を重ねていくうちに、「地元再発見の旅」のリピーターの方も増えてきている。

かがわ komachi ８月号

また、本プロジェクトは大学と企業が連携した取り組みということで、各所から注目されている。テレビや新聞、ラジオなどのメディアに取り上げていただいたことで、またたびの存在を知ってもらう良い機会となった。さらに、今年度はより多くの人にまたたびを知ってもらうためにホームページを作成している。ほとんど完成しており、今年度中の公開を目指している。広報面ではほかにも、リーフレットの作成や２０１６年８月号からは香川 komachi での連載も開始しており、行ったツアーの内容や視察、普段の活動の様子などを毎月学生が手書きで作成している。

聞き茶巡りのお茶

２月には、京都にある京都文教大学の学生と交流を行った。そこでは、京都の宇治市を盛り上げるためにツアーやスタンプラリーを行う「宇治☆茶レンジャー」という学生プロジェクトがあった。そのツアーでは、宇治抹茶のお店をめぐる聞き茶巡りを行っており、私たちもそれに参加した後、宇治☆茶レンジャーの生徒と意見交換をした。プロジェクトができたきっかけは授業の一環であり、このプロジェクトは今年で７年目になるが宇治橋商店街は昔人通りも少なく廃れていたので、そこの特産品である宇治抹茶を知ってもらうことで街を活性化させようとした。主な活動は、子ども向けのスタンプラリーと年配の方向けの聞き茶巡りとまちづくりカレッジで、それぞれの準備期間は３．４か月である。行うイベントごとにターゲットの世代を絞っていて、お客様の不満をなるべく減らし、重要な点をきめてツアー作りに挑んでいる。そして、集客のためのツアーの宣伝の工夫としては、知り合いの人に宣伝するの

宇治☆茶レンジャーさんとの集合写真

が一番有効だそうだ。そのため、他のイベントなどでいつでもチラシを渡せるようにメンバーは常にチラシを持ち歩いているそうだ。ツアーの打ち合わせの際に気を付けていることは、協力してくださるお店に行く時は、そのお店についての下調べをきっちりしていくこと、県外出身ということを利用して教えて下さいという姿勢で向かうことであると教えていただいた。

今回のこの視察で、ツアーをするときの下調べの重要さを改めて感じた。ツアーをガイドする際にも、地域の方に任せきりな部分があるので、今後は私たちも地域のことやお世話になるお店のことをしっかりと理解し、メンバー全員がお客様に説明できるように努めていきたい。広報面では、宇治☆茶レンジャーの方のお話を参考にして、私たちも身近な人たちに向けての宣伝もしていきたい。

ツアー中の集合写真

またたびメンバー手作りのクリスマスカードをお渡ししました

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

大学にもたらした影響としては、大学と企業が連携した取り組みはあまりないため、本プロジェクトが大学と企業が連携した事業の１つの可能性を示すことができたのではないだろうか。また、本プロジェクトに参加するためにこの大学を志望したメンバーもおり、私たちの活動が今後入学してくる学生にも影響を与えていると言える。

地域社会の活性化にもたらした影響としては、本ツアーがきっかけとなって今まで知らなかった地元の魅力的な資源などを知り、その後もその地域へ訪れる方が増えたことがある。また、地域の方とツアーを行うことで、経済的な面でも協力ができていると言える。さらに、私たちがツアーを行うことで、地域を活性化しようと取り組まれている方々を勇気づけられている。

これらは、この活動が与えた影響であると言うことが出来る。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

学業の振興にもたらした影響としては、前述したように、本プロジェクトでは学生が主体となってツアーの企画・交渉・添乗全てに携わっており、学生のうちからリアルな旅行業が経験できている。これは長期的なインターンシップの役割を果たしており、将

来旅行業・観光業につきたい学生にとって、貴重な学びの場となっている。本プロジェクトを通して、“観光”のチカラで地域の魅力を発信することは地域活性化に繋がるということを、身をもって学ぶことができた。

また、１つのツアーが完成していくまでの大変さややりがいなど、旅行業務に関する様々なことを、自分達で実際に企画していくことで学ぶことができた。

本プロジェクトは、来年度も引き続き新日本ツーリストと連携して「地元再発見の旅」の企画を実施していく予定である。これまでに引き続き地域の良さを伝えるテーマ性のあるツアーを企画しながら、活動を知っていただくための広報にも力を入れていく。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

これまでのツアーは、私たちから地域の方に声をかけてツアーを行う依頼型のツアーだったが、これからは地域の方に望まれてツアーを行う募集型のツアーに移行していきたいと考える。６月に行った三野町のツアーは、三野町の方に「またたびにツアーをしてほしい。」と声をかけていただき始まったツアーだった。そのため、私たちが思っていた以上のおもてなしをしてくださり、いつも以上に地域の方の温かさを感じることができた。結果的にお客様の満足度も高い、お客様にも地域の方にも喜んでいただけたツアーとなったので、募集型のツアーに移行していきたい。そのために、ホームページを作成し、ツアーをしてもらいたい地域の方に向けてのお問い合わせページも作成している。

反省点としては、ツアーの集客が十分にできなかったことが挙げられる。その原因として、ツアー内容の決定が遅く広告に載せる回数が少なくなったことが考えられる。今後は、先のことを予測し早めに計画的にツアー作りに取り組み、広告に載せる回数も増やしていきたい。また、今まで使用していた Facebook と Twitter の宣伝方法に加え、ホームページやリーフレットを活用し、広告方法を工夫していきたい。

７．実施メンバー

代表者	東谷　風花	（経済学部２年）			
構成員	眞方　春花	（経済学部３年）		石川　めぐみ	（経済学部３年）
	谷口　隆博	（経済学部３年）		白石　小百合	（経済学部３年）
	高橋　佑芽	（経済学部３年）		海老　智尋	（経済学部２年）
	増田　友美	（経済学部２年）		阿河　友紀子	（経済学部２年）
	片山　実穂	（経済学部２年）		永井　成味	（経済学部２年）
	井本　航樹	（経済学部１年）		太田　好	（経済学部１年）
	萩野　名奈子	（経済学部１年）		佐川　貴和子	（経済学部１年）
	高下　彩	（経済学部１年）		堤　菜美	（経済学部１年）
	小笠　葉奈	（経済学部１年）		井川　直香	（経済学部１年）